
魔導師の生まれた日

佐遊樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導師の生まれた日

【Nコード】

N7154J

【作者名】

佐遊樹

【あらすじ】

これはとある世界のお話。自らの信念の元、少年は戦う。その果てに何が待っているのかも知らずに――【この物語は主人公最強・ハーレムモノです。ただ、突然主要キャラが死んだりします。ご了承ください】

L o s t ー 1 始まりの出会い (前書き)

新連載です。

作者初のファンタジーですので、生暖かい目で見てください。
なお、十話程度で完結予定です。

Lost 1 始まりの出会い

堕ちてゆく。

手を伸ばしても、届かなくて。

暗転。

無力な自分を呪って、雨に打たれて。

それでも力は手に入らなくて。

暗転。

絶望しかなくて、それでも生きるしかなくて。

死ぬ間際なのに、やけに穏やかな表情だったあの少女が眩しくて、苦しくて、直視できなくて。

暗転。

だからこそ少年は、『力』を欲した――

アンゼライン共和国を、朝日が照らす。

小さな村の中で、一人の少年が眼を覚ました。

名は日中五光^{ひなかついつく}。まだ7歳の少年だ。

ごく普通の少年は、いつものように目を覚ます。

もっとも、一年前に彼が遭った事件は、普通とはかけ離れていたが。

大雨が降った昨日、少年の目の前で少女が転んだ。

親戚の家へ手紙を届け、ついでお駄賃を貰い、意気揚々と村に帰ってきた五光を待っていたのは、少女の悲鳴。

荷物を投げ出し、悲鳴がした方へと駆け出し。

崖から今にも落ちかけている少女を視認し。

手を腕を体を伸ばして。

ただひたすら、彼女を少女をあの子を助けるために――！！

後日、崖の下から少女の遺体が発見された。

頭を打ち付けての即死。雨に足を滑らせ、落下したらしい。

その日以来、日中五光の笑顔は滅多に見れなくなった。

早朝、鳥達がさえざる頃からすでに五光は裏山に居る。

木の枝を削って作り上げた、自作の木刀。

時には一直線に、右から左から捻りねじ込み、刀を振り下ろす。タイミングをずらし、不規則に。

あえて最速で振り下ろし、相手の裏をかき。

その技術は、すでに少年が身につけるようなものの垣根をはるか

に越えていた。

やがて五光の人生は、大きく狂わされていく——その力ではなく本人でもなく、周囲の人間によって。

「アンタ、歳いくつ？」

突然後ろから聞こえた声。

五光は振り向きざまに木刀は振り下ろす。電光石火、脳天に振り下ろされる一撃。

しかし。

「邪魔」

木刀と、声の主の間に——割り込むようにして、魔方陣が展開された。

蒼空の如く蒼いソレ。7歳の五光の掌に収まるほどの大きさの円陣は、しかし木刀をアッサリと防いでみせた。

「なっ!？」

「筋は良いけど、独学じゃ限界があるのよ、ね……ッ!」

次の瞬間、衝撃。

それが、目の前に居る女性が放った回し蹴りだと認識する前に――五光の意識は闇に叩き落とされた。

「起きた？」

目を開ければ、眼前には知らない女性。ブロンドの髪は腰まで長く伸びており、碧眼の釣り眼が、なんとなくこの女性の性格を物語っていた。

上体を起こせば、首がゴキッと嫌な音を立てる。どうやら首に食らったらしい。

「起きましたけど……僕を殺す気ですか？」

「それはあたしの台詞よ。あのままアレ食らってたら、あたしは今頃二つに裂けてるわ」

そう言って彼女が指差すのは、地面に突き立てられた木刀。

確かに、あのスピードで脳天に当たれば、文字通り頭が割れていただろう。

「……すいません」

「謝ること無いわよ、アレくらい防げなきゃ『魔術師殺し《カウンターキル》』の名が泣くわ」

聞いたことの無い名。

「『魔術師殺し《カウンターキル》』……？」

「そ。私は真正銘本物の魔術師よ」

そう言って、彼女は微笑んだ。

「名前はエリアル・デ・ラ・ピット。趣味は年下の男の子をなぶることよ」

「何か今すごい物騒な発言が聞こえたんですけど」

すかさずツッコム五光。エリアルは「ジョークよジョーク」と受け流すが、五光的にはやはり看過できないらしい。

「年下趣味は本当だけどさ（まあ冗談はおいといて）」

「本音と建前が逆になってますよ」

「チッ」

「舌打ちしないでくださいッ！」

ゼエハアと息を荒くしながら、五光は目の前の女性を見る。どうやら年下をいじる趣味と言うのは本当らしい。

「まあ、それはとにかくとして」

そう言って、女性はすぐ傍の切り株に腰を下ろす。

「あんた、あたしに何か言うことないの？」

「へ？」

「……どうしてあんたみたいな子供が、こんな時間から剣の鍛練を積んでるのよ」

五光は思わずたじろぎながら、エアルの眼をじっと見つめた。
お互いが見詰め合う数瞬――

「……ま、まあ、あたしでよければ相談に乗るわよ」

何故か顔を赤くしながら、エリアルは顔を逸らした。

「じゃあ、遠慮なく」

どこかホツとしながらも、五光は口を開く。

少女を助けられなかったこと。

それが悔しくて、力を欲したこと。

だから、毎朝このように訓練を行っていること。

「……それで、あんたはどうしたいのよ」

話を聞き終わって、エリアルがまず発した言葉は身も蓋も無いものだった。

「どうって、一体？」

「力を手に入れたあんたは、一体何になるのよ？」

何になるのか。

力を手に入れて。

それで。

誰かを救えるような人。

危機に颯爽と現れて。

そうして人を助けていくような、そんな――

「――『セイギノミカタ』に、なりたいです」

「じゃあ、あたしがその『セイギノミカタ』にしてやるわよ」

そう言って微笑む彼女の笑顔はとても美しくて。

その日から、天国でもあり、地獄でもある日々が続いた。

「はい、次は腕立て伏せ二百回ね」
「……一……二」

黙々と筋力トレーニングを続ける五光。

頭には痛々しいコブができており、エリアルは手元で木刀を二本、弄んでいた。

「あたしの予定では、あんたを二刀流に育て上げるから」

「どうしてですか？」

「乱戦の中でも生き残るためよ」

先ほどまで木刀をお互いに二本ずつ持ち、五光とエリアルは剣の

試合をしていた。結果は当然五光の敗北。

「ま、7歳にしては上出来どころか限界突破状態ね」

「それでも……足りません……よ」

汗を地面に垂らしながら、五光は腕立て伏せを続けていく。

「百九十九……二百……！」

最後の雄叫び、もとい断末魔の悲鳴を上げながら五光はフラフラと立ち上がる。

「よし、それじゃあ昼ごはんにしましょう。あんたの妹……確か、桜ちゃんを呼ばなきゃ」

「……もう、無理です……」

そう呟いて彼が倒れこんだのは、エリアルエリアルの胸。

村人達から『メロン』と言われるまで育ったそこへ、五光はダイブ、心地よい感触の中眠りの世界へ潜っていった。

エリアルは顔はおろか耳に首筋まで真っ赤にしてフリーズ。『魔術師殺し《カウンターキル》』の威厳も形無しである。

ちなみにその日、五光が夕方に目覚めるまで二人はその姿勢のままだったという。

エリアルとの鍛練が始まり、一ヶ月。

村は平和だった。村は。

アンゼライン共和国に、隣国のラーゼライン帝国が宣戦布告。

両国の戦争は、兵の数も質も勝り、なおかつ数多くの魔術師を持つ帝国のワンサイドゲームとなり。

共和国が滅ぶのは時間の問題だった。

「ほら桜ちゃん、逃げるわよ」

「エリアルさん、でも、村の人たちが……」

五光達が住む村に、帝国の兵士達が迫っている。

その情報を得た村人達は、女子供達を優先して逃がし、男は防衛ラインを築いて兵士達の侵攻を阻止。戦闘が始まって既に3日が経っていた。

「これで最後じゃな」

走り出した馬車を見送りながら、五光の隣で村長が呟く。

「五光、良かったのか？」

「別に良いですよ、桜を護るためなら」

その言葉に、村長は満足そうに頷く。

「村長！ 第二次防衛線が突破されましたッ！」

伝令が息を切らせて村長に駆け寄る。

「……聞いたな、皆の衆」

村長の言葉に、村人達が全員集合する。

「恐らくここに居る者は、誰一人として生き残ることはできまい」

だからこそ、と、村長は呟き――手に持った槍を掲げた。

「一人でも多く、帝国の愚兵共を道連れにするのじゃあアアアッ
！！」

『オウ！！』

そう言って村人達は、各自の位置につく。残された戦法は、不意打ちによる乱戦への持ち込み。

――たった30人程の村人達が帝国の軍勢を足止めしたこの戦いは、しかし後世に知る者は居ない。

「オラオラ、子供に何ができるんだよ！」

「――――ッ！！」

大人の兵士は、やはり力が違う。しかしそれを五光は受け流し、隙だらけの胴部へ――エリアルが『鍊金』で生み出したロングソードを叩き付けた。

「ぐうっ！？」

「邪魔、だっ！」

姿勢を崩した男を蹴り飛ばし、五光は視線を当たりに巡らせる。右手に持ったロングソードはともかく、左手のロングソードは真つ二つに折られており、使い物にならない。その痛々しい剣を構える左腕もまた、刃で斬られていた。

（桜が乗った馬車は！？ エリアルさんは！？ 村の皆は！？）

左腕の出血が、五光から冷静な思考を奪う。

村の建物は全て火柱を立て、煙が辺りを覆う。

「……………ッ！！？」

その中、五光は見つけた。否、見つけてしまった。

煙の向こう、先ほど逃がしたはずの馬車が、馬車の残骸が、路上に横たわっているのを。

少年の頭の中で、何かが崩れる。

兵士達が、女子供を引立てて。下劣な笑みを浮かべながら、細い腕を掴んでいた。

「……………ふざけるなあっ！！」

怒号が天を震わせ、地を怯えさせる。

今までに無い程の気迫と気力が体を満たす。

（……………何だよ、コレ？）

まるで感情の高ぶりに従うかのように。

（力が、満ちていく……………ッ！）

それを人は、『バケモノ』と呼んだ。

——さあ、『セイギノミカタ』を始めろ。

どこからか聞こえたその声に、五光は頷き、そして踏み出す。

自分の『正義』を護るために。

その刹那——

「……………え？」

音も無く、五光はその場に倒れこんだ。
頭がクラクラし、思考が働かない。

（……………なん、で……………）

確かに、気力は満ちている。しかし、7歳の少年の精神は既に限界だった。

「ちく、しょう……ッ！」

芋虫のように地面をはいずり、五光は馬車へと向かおうとして、その場に吊るされた。

「ハハハ、こんな子供まで戦ってたのかよ！」

後ろから、帝国兵士が、少年の頭を鷲掴みにしていた。

「……は……な、せ……」

こんなところで止まっていられない。

あそこに、あの先に、桜が居るから。助けなきゃ、家族を、妹を、そのために、力を手に入れたのに。

「まったく、ガキのくせに何一丁前な装備い……！」

刹那、兵士の胸から剣が生えた。

それは瞬時に発火し、兵士を燃やし尽くす。

「…………ッ！」

瞬時に地へ足を付け、五光は後ろを振り向いた。そこには、自分の師の姿が。

「エリ、ア——」

けれど。

彼女は何かを叫びながら自分に突っ込んできて。

突き飛ばされる、横へ。

視線を向ける、彼女へ。

確認する、矢が刺さったのを。

何に？ エリアル胸に。

何が？ 一本の矢が。

どうして？ 自分が狙われていたのを、エリアルが庇ったから。

「……どう、して……」

見えた彼女の表情は、笑顔。

「――さっさと逃げるわよ、馬鹿弟子」

彼女は自分を抱え、林へと飛び込んだ。

「もう……限界ね……」

それほど走ったのか、考えるのも馬鹿らしくなる。
村は恐らく遙か彼方。引き返すことはできない。

「なんで、こんな」

矢を引き抜けば、彼女の服は真紅に染まった。

「どうして」

ゴフ、とエアリアルの中から血が漏れる。

「あんた、何その表情」

自分は護るための力を手に入れたはずなのに、現実は何だよ。
何も、護れてない。護れやしない。

「折角助けてあげたんだから」

「僕は、僕は……ッ！」

いつからなのか忘れたけど。

僕は、貴女が好きなのに―――！

「あたしき、あんたのこと、好き、だから」

唇が重なる。

ほんの数秒の触れ合い。

彼女はふっと微笑み、満足そうに微笑み、眩しく微笑み。

アンゼライン共和国は、滅亡した。

L o s t ー 2 加速して加速して加速する（前書き）

無駄に長いです。　　というか、主人公をどうすれば最強にできるのか
分かりません。

Lost-2 加速して加速して加速する

「ラーゼライン帝国が生まれ、本日で丁度10年になります。先の戦争では見事アンゼライン共和国を打ち倒し、悪政を働いていた国王を共和国民の眼前で斬首刑に処し……」

街中に響く、女性の声。

魔術によって拡散する声。

帝国国民に、『真実』を伝える声。

「馬鹿らしいね」

放送を聴き、吐き捨てるように呟く少年――

日中五光は、帝国に住んでいた。

栗色の髪が、風に吹かれて乱れ狂う。

五光はそのとび色の瞳で、目の前の光景を脳に焼き付けていた。

「オラオラ、さっさと金を出せよ!」

一軒の民家に押し入る、3人組の男達。覆面を被っており、顔は見えない。

手には小さなナイフ。それを小さな女の子の首筋に押し付けており、どうやら人質のようだ。

「……ったく、僕も正直疲れるんだけどね」

文句を言いながらも、五光は少し頬を緩める。

（誰かを救えるような人。危機に颯爽と現れて。そうして人を助けていく、か）

今思えば、既にこれから1年が経っていた。

アンゼライン共和国はラーゼライン帝国に滅ぼされ、領土は併合、共和国のほとんどが帝国の国籍を得られず、今も路上生活などの憂き目に会っている。

しかし。

（あんのクソジジイ、何がしたいんだよ）

舌打ちをしながら、五光はポケットに手をつ込む。

ポケットの中で、簡単な魔法陣を描き、詩を詠唱した。

「――The Power of You is for others 《その力は人の為に》」

世界が、モノクロになった。

見た人は全員眼を背けるほど、それは悲惨だった。

強盗に押し入れられ、小さな一人娘は人質に、父親はなぶられ、母親も路上に投げ捨てられ。

男達は家の中から、金目の物を服のポケットやカバンへと手当たり次第に入れ込む。

「おい、そろそろズラかるぞ」

「うっす」

リーダー格の男が指示し、男達はそれぞれ退散の準備を始める。

その刹那。

男達の中の一人が、路上へと叩き出された。

「……………へ？」

残りの二人も野次馬も、目を丸くして事態の顛末を見る。

呆然とする覆面の男に、背後から衝撃——その男もあえなく宙を舞い、地面に叩きつけられた。

「ッ、魔術師か！」

慌てて得物を探す最後の男は、顔を上げた瞬間に、確かに見た。

自らに迫る、それこそ10歳にも満たないような少年を。

少年の拳が鳩尾に入り、男は家の壁に叩きつけられた。

日中五光は、基本的に魔術が使えない。

使える魔術は、先ほど利用した簡単な身体強化。エリアルが唯一教えた魔術。しかしこれが、五光の最大の強み。

1年間、五光は体術と剣術、そして一つだけ使える魔術を徹底的に鍛えてきた。

勿論、たった1年で達人に域にまでは辿り着けないものの——確実に、そして着実に、その実力は上がっている。

身体強化は、脚力や腕力を高めるだけ。しかしそれを極限まで高めれば、まさしく人外の力を得ることができる。

集中力と肉体能力の上昇による、極限までの加速。

それを使えば目にも留まらぬ速さで動けるし、攻撃時の威力も何倍にも跳ね上がる。

速度的に言えば、本人こそ気づいていないが既に音速を突破していた。

しかし。

「あああああつつうういいいいつつ!!」

あまりのスピードに、空気との摩擦で熱が発生し、当然のように五光の表皮は火傷する。

路上をゴロゴロと転がる、8歳ほどの少年に全員が口をポカンと開けた。

「えっと、パトロール中に一般市民から『強盗が路上で暴れている』と聞き慌てて駆けつけたのですが何故か男の人が三人倒されていて路上では少年が一人すごい勢いで悶え苦しんでいるのですが私はどうすればいいのでしょうか?」

「なんでそんな説明口調!?!」

どこからともなく聞こえた声に、音より早くツツコム五光。

声がした方を向けば、帝国軍の制服に身を包んだ女性がオロオロと戸惑っている。

「えっと、帝国軍帝都警備団第03隊隊長、神代六子かみしろむこです。趣味は剣術、好きな動物は兎ちゃんです。住所は……」

「ストオオオップ!! それ以上は個人情報漏えいです! というか色々余計な事まで言ってますから、しかも自ら!」

「いいじゃないですか、兎さん可愛いんですし!」

「そこには反論してないッ!」

ギャアギャアと騒ぎ出す二人。最早漫才の領域である。

「――それにしても五光君、事務を放棄して街を闊歩するなんていいご身分ね……」

「チッ、神代六子……」

厄介なのに捕まった、と五光は溜息を漏らす。

「まあ、僕も黙って捕まるつもりはないんでね」

「君のことだから、そう言うと思ったわよ、日中五光……二代目『魔術師殺し《カウンタークル》』兼、『亜光速少年《アポカリプス・アクセラ―》』君?」

「そんな余計な上にややこしい二つ名、いらないんですけどね」

吐き捨てるように呟く少年。

「貴方ねえ、いくら仕事が面倒だからって、サポタージュはダメでしょ、サポタージュはッ!」

言葉を言い切るか否か、その時――彼女の隣を、一陣の疾風が駆け抜けた。

無論、日中五光その人だったが。

「……ふふふ、この私を素通りなんて、いい度胸してるじゃない……」

額に青筋を浮かべながら、六子はまさに漆黒のオーラを身に纏った。……ちなみに比喻ではなく、一般人にも視認できるほど濃くドス黒いやつを。

『ヒ、ヒイイイ……!!』

『あ、あれが『弱き者の盾』……?』

『冗談じゃない、護ってもらうどころかブチ殺されそうだ』

実際殺しかねない。

「五光君……覚悟おおおおおおおおおおお!!」

彼女の叫びは、大空へと響いて帝都を震わせた。

六子が所属している機関は、帝国軍直属の警備団。通称『弱き者の盾』である。^{アンズ}

名義としては五光もそこに所属しているのだが、いかんせん本人にやる気が無い。全く無い。ゼロを通り越してマイナスである。

もっとも、市民達の犯罪に手を貸すような真似はしていないが。

この帝都警備団、五光も含めバケモノの集団である。

本人がその気になれば亜光速のスピードを出せる『亜光速少年』アポカリプス・アクセラ』こと日中五光以外にも彼と同格の間が多数存在するのだから。

……ただし、警備団メンバーは4人だけなのだが。

「第03隊、ただいま到着しました」

「……04隊、同じく」

警備団の本拠地に終結した、4人の男女（男…女…1…3だが）。

「……団長」

「どうかした？」

紫色の髪を腰まで伸ばし、軍服を着こなす女性に五光は声をかける。女性はコーヒーカップを傾けながら、五光と視線を合わせた。

「ずっと思ってたんですが、メンバー僕達だけだったら隊に分ける必要ないと思うんですけど」

「甘い！」

「そのコーヒー、ブラックですよ」

「これではない、お前が甘いのだ！」

「それ淹れなおしましょうか？」

「うむ、頼む」

「結局甘かったんですか！」

どうやら五光はどこにいてもツツコミ役らしい。

「まあ04隊隊長よ、これも帝国の伝統というものだ」

「この警備団って確か2年前にできたはずですけど」

「……各自、点呼！」

「盛大に誤魔化しましたよね!？」

若干汗をかきながら3人の部下に指令を出すのは、警備団長である明日原凜。
あすはらりん

ブスッとむくれながら凜にツツコムのは第04隊隊長日中五光。

「第02隊、揃ってます」

律儀に点呼に答えるのは第02隊隊長、ミライ・サステンベルグ。髪は蒼く、ショートカットに切り揃えられている。

家はサステンベルグ公爵家だが、本人が勘当も覚悟の上で軍に入ったという。

（……なんでそこまでするのか、イマイチ理解できないんだけどなあ）

軽いため息をつきながら、五光は隣で自分をチラチラ見てくる神代六子へ視線を向けた。

第03隊隊長にして、恐らくこの面子の中では自分と最も親しい人物。

（だって居候先だしなあ）

どうやら今日も、地獄の4時間ノンストップ説教フルコース（デ

ザートに号泣）らしい。

「さあ、各自報告を始めろ」

団長の命令に、五光はかぶりを振りながら応じることにした。

「うだあー、やっと終わったー……」

木製の机にダレながら、五光は愚痴をこぼす。

「ああ、それじゃあ今日は解散だな」

「はあーい」

「それと、コーヒーご馳走様」

「すいません、いい加減本部造りませんか？」

現・帝国軍帝都警備団本部Ⅱ神代宅内日中五光の部屋。

若干涙目な五光。ちなみに家に帰るとちよくちよく凜やミライが居たりする。プライバシーの欠片もない。自分の部屋が欲しいというのは、第一次反抗期の子供らしいと言えbraらしいのだが、ついでに美女が二人付いてくるとはどんなおまけだろうか。ビックリマンも驚くほどの贅沢なおまけである。

「五光君、今から買い物にでも」

「五光、訓練に行くぞ」

六子の言葉に、わざとかぶせるようにして声をかける凜。表情はニヤついている。

「……………」

「え、えっと、六子さんも来ますか？」

身も心も凍てつくような視線を浴びせられ、思わず妥協案を口走る五光。

というわけで。

「五光君 v s 私&凜隊長で模擬戦を行います」

「絶対勝てないんですけど!？」

「安心しろ、とりあえず力は5割増しでやってやるから」

「むしろパワーアップしてますよ、それ!」

帝国軍の訓練基地、その一角にある訓練場を借りて、3人は模擬戦を行おうとしていた。ちなみに審判はミライ。

五光の対戦相手である六子と凜は、額に青筋浮かべて完全なブチ切れモード。本人らいわく、

『せめてどっちかに決めて欲しかった、あの朴念仁め!』

とのことだった。

「それでは3名とも、準備はよろしいですか？」

「オッケーよ」

「問題ないです」

「……僕がやらなきゃいけないんでしょ、畜生！」

3者3様の返答を聞き、ミライは魔術で自らの声を響かせた。

「それでは、始めてください！」

果てしなく不毛な戦いが、始まった。

L o s t - 2 加速して加速して加速する（後書き）

これからも更新は、バッチリ滞ると思います。……月の内にはもう一度更新すると思うので、まあ生暖かい目でご覧ください。あ、評価・感想よろしくお願いします。

L o s t - 3 模 擬 戦 と 反 省 会 と お 泊 り 会 (前 書 き)

また無駄に長めです。

あと、予想外にミライさんが良い人に。アレ？ 本来何事にも無関心なキャラだったのに……

Lost-3 模擬戦と反省会とお泊り会

魔術とは何か。

かつて帝国を治めた第16代皇帝は、次の言葉を遺した。

『魔術とは、魔を操る術ではない。魔を操ったつもりになれる術である』

この世界の大気には、窒素が存在しない。代わりに大気の78%を占めるのは、魔力と呼ばれる物質。

未だ完全な解析が成されていない未知の物質であるそれは、ダークマタービンなどの容器に入れることができる。

そしてその魔力を使い、魔力と魔力を用いて特殊な反応を起こすことを、人々は『魔術』と呼んだ。

言うならば、化学反応式のようなものである。炭素と酸素を化合すれば二酸化炭素ができるように、魔力の種類によって様々な反応が起こる。爆発や発火、再生や錬金などだ。

しかし魔術によって使用される魔力は指定されるため、魔術を使用するにはシビアな条件が付く。

これらのことは、この世界では常識的なものだ。

付け加えるなら、魔術はあくまで複数種の魔力によって発動するものであって、一種類の魔力ではほとんど何もできない。極限まで魔力を濃縮させれば爆発などが起きるが、失敗した時のリスクが高いため誰も使わない。

ここまで書いて、何を言いたいかといえば——日中五光は、これらの常識をことごとく破壊してしまった、ということだ。

「――The Power of You is for others《その力は人の為に》」

模擬戦が始まってすぐに、お得意の身体強化を施す五光。
そして相手は――

「神代流剣舞奥義其の式、『せみしぐれ蟬時雨』ッ！」

「Your No human《人ならざる者よ》, Depart
from the my world《我が世界より去らぬば》,
Disempower to you《その力を奪わん》――『アッ神
ミリテッドルシニア々への反逆』！」

殺戮モード・オンだった。

「つてギャアアアアア！！」

超高速で地面を駆け、二人と距離をとる五光。

上からは魔術の雷が雨あられと振り、『弹幕薄い、何やってんの
ー！』とは間違っても言えない状況だ。神々への反逆と言うか、むしろ神が怒り狂っているかのような攻撃を、五光は避ける、ひたすら避ける。

「————ッ！」

と、背後からの瞬間的な殺気に身がすくみ、慌てて横へと転がる。先ほどまで五光が居た空間を、一本の剣が貫いていた。

神代家家宝・名刀『鬼切^{おにぎり}』。刀身を薄く染める紅は、古来の先祖が鬼を切った時のものと言われている。

ただでさえ切れ味が凄まじいのに、六子は自らの魔力を注入することでその鋭さを何倍にもしていた。

頭上からの雷をサイドステップで避けつつ、五光は眼前の敵に狙いを絞った。

神代流剣舞奥義は、基本的な攻撃方法として『突き』を利用する。日本刀の長いリーチを有効に使うために編み出されたと言うが、それを巧みに使いこなせる者は神代家の中でも一握り。

その中の一人が、目の前に居る神代六子。

「蟬時雨……げ、アレか！」

記憶の中から該当する技を思い出したらしく、五光は身を強張らせる。

「————！」

六子が繰り出す突きは、余りの速さに残像ができています。その残像と相まって、まさしくそれは剣の壁。

蟬がいつせいに鳴くように、雨が一気に降るように、突きが連続で繰り出される。

「だけど、僕も伊達に警備団所属」

「ハアアアア!!」

蝉時雨、スピードアップ。

「ちょ、ごめんなさいいっ! まことにすみませんでしたああああ
!!」

謝りながら回避運動を続ける五光。なんとも器用な男である。

「五光、お前の敵は六子だけではないぞ!」

その声に振り向けば、陣を描いて詠唱を開始している凜の姿が。

「It's a blue sky birds 《青空の鳥よ》,
will flap its wings 《翼をはためかせ》, fly
away to the sky 《天空へと舞い上がれ》.
——『蒼空の飛翔翼』!!」
ヘヴンズフエザー

瞬間、空中に巨大な魔法陣が形成された。周囲の空気を巻き込むようにしてそれは回転し、やがて巨大な翼をはためかせる。

「余所見なんて余裕ですね!」

「げえっ!」

休む暇すら与えない、六子の突き。上空では大技が着々と準備を進める。

「完全に僕を殺す気じゃないですか!」

思わず悪態をつきながら、五光は自分の足に込められた魔力を一

層強化する。

「ッ、もっと速くなるって言うの!？」

五光は鬼切の斬撃を避けつつ、思考する。

(このままじゃ勝てない……絶対に成功するかは分かんないけど、アレをやるしかない!)

回避を続けながらも、ただ自らの意識を研ぎ澄ませ、体内に荒れ狂う力の波を抑え込み、その魔力を右手に集中……集中……集中……!

一極化されたその力は、五光の手の中で輝く。
傍から見れば、まるで五光の右手が発光している様。

「な、魔術!？」

身体強化以外の魔術に、思わず六子が動きを止め。

「弾けろッ!」

五光が突き出した右手は、六子が突き出した鬼切を掴み取った。

魔力が込められた刃と、五光の掌がぶつかり合う!

「くう……ッ!」

「弾けろ、弾けろ弾けろ!」

たった一種類の魔力を、五光は極限まで濃縮。そこから導き出される結果は――

「弾けろオオオオオオオオオオ!!」

魔力の爆発!

爆風で鬼切が煽られ、六子の体制が崩れる。
五光は左手を彼女の体の前に突き出し。

「しまっ、」

先ほどとは比べ物にならない程の密度で、魔力を集中――

「――爆ぜろッ!!」

それは爆発ではなく爆轟。燃焼による爆発のうち、炎の伝播速度が音速に達すれば、その名は爆轟と変わる。

爆轟の最大の特徴は、衝撃波を伴うため周囲に甚大な被害を及ぼすこと。

つまり至近距離に居た二人は、当然衝撃波をマトモに受け――
なかった。

六子は自ら後ろに飛ぶことでダメージを減らし、五光は亜光速のスピードで衝撃波を振り切る。

まさしく人外同士の戦い。

「六子さんは戦闘不能でいいですか？」

「な、まだ私は戦える——！！」

と、いきり立って立ち上がろうとした瞬間、六子は痛みに顔を歪めた。

恐らく助骨の2、3本が折れたのだろう。立つことすらままならない。

「神代六子、戦闘不能です」

「……ッ」

流石に弟分に負けたのはショックなのか、六子は俯いてしまった。五光は思わず何か言葉をかけようとして——

（……あ、上）
へウンズフエザー

「団長を無視とは、中々いい度胸ですね、五光君」
「ミライさんッ！ それフォローになってない！」

絶叫しながら、五光は上空を見上げた。

——空を覆い尽くす、白銀の羽。

基地にいた帝国兵士はそれを見上げ、思わず感嘆の息を漏らす。
ミライでさえも、それに見とれていた。

その幻想的な光景を楽しむことができない者、約一名。

「……団長、流石にこれは死にます」

「……H a s t a l a v i s t a , B a b y 《地獄で会おう、
ベイビー》！」

基地が光に包まれた。

「——『タキオンアクセラ光速到達』 ツツ！！」

光が止み、凜は周囲の惨状を見やる。

白銀の羽が、その鋭い先端が地面という地面に突き刺さり、この世界では貴重な鉄でさえも、いとも簡単に貫いていた。

けれども。

「ッ、隠し玉とは容赦ないな……」

日中五光は、凜の背後に悠々と佇み。

発光する右手を、背中に押し付けていた。

「チェック・メイトです」

「私の負けだ」

その言葉に、茫然自失としていたミライはハッと意識を取り戻し、辺りに声を響かせる。

「勝者、日中五光！」

なんか色んな物を犠牲にしたなあ、と五光は思う。

白銀に染まった基地を見て。そして何より、後ろから来る凄まじいプレッシャーを感じて。

背後を見れば、基地長がいらっしやった。^鬼

「で、基地の隊長さんに怒られてきました」

「「はい」」

「何が原因だったでしょう、凜さん」

「さっさとやれらなかった五光が……」

「晩御飯抜きますよ」

「むやみやたらと大技を使った明日原凜こと私が悪かったと心の底から思いました」

所変わって神代宅。

基地をボロボロにしまったので基地長さんからこつてり絞られた警備団は、「もう夜なんでウチ泊まります？」という六子の発案により神代宅に集合していた。

割と晩御飯に最適な時間、午後7時ごろなので団員達は晩御飯を心待ちにしていたのだが、ここで神代宅の料理番長こと日中五光が「異議あり！」コマンドを選択。こんなことになった経緯を現在進行形で絶賛振り返り＆反省中だ。

ちなみにこの「第1回帝都警備団『基地ボロボロにしちやっただ、てへっ★』反省議会」の議長は五光、書記はミライ。凜と六子は正座である。

「足が、足の神経が……ッ！」

「……………」

流石に家で道場開いてる六子は大丈夫なようだが、「紅茶よりコーヒー派、緑茶なんて外道」と豪語する凜は全然大丈夫じゃないらしく、名前漢字なくせに涙目でブルブル震えていた。

ちなみに、そんな団長を見て若干五光が悦んでいたのは本人だけ

の秘密だ。……案外この少年、鬼畜なのかもしれない。真相は不明だが。

「まあ、そろそろご飯にしますけど」

「や、やつと正座から抜け出せる……」

「……確かこの家って食事時は座布団だったはず」

ミライの指摘に、凍りつく凜。五光と六子は、顔を見合わせ噴き出した。

「――で、団長。いえ、明日原凜。貴女は鬼切の錆になりたいのですか？」

食後、全員が風呂を済ませてさあ寝ようという所で、思わぬアクシデント発生。

寝るところを巡って、凜と六子が大喧嘩中なのだ。……果たしてどちらが五光の部屋で寝るのか、というもので。

ちなみに、五光の客間という案は却下された。それこそ光速で。

「じゃあ、五光君に決めてもらいましょう」

「いいだろう」

って、この局面で僕ですか！？ と五光は戦々恐々。

「さあ」

「五光よ」

六子は目で「団長を選んだら明日は特訓フルコース」と言い。

凜は口パクで「六子を選んで、警備団から叩き出されたいか？」と伝える。

「……僕は」

一瞬の逡巡。

「ミライさんと寝たいです!!」

頭を冷^{死にかけた}やされた。

結局その案が採用され、現在五光の部屋には部屋の主とミライのみ。

しかし、ここで五光にとって想定外の事態発生。

「……ここの部屋はあなたのものだから、私は床で寝るわ」
「いや、お客さんを床で寝させるわけには」

五光の部屋には、ベッドが一つしかないのだ。

「だから、あなたが……」

「いえ、ミライさんが……」

遠慮に次ぐ遠慮。

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

「……お、願ひ……します」

少し納得いかない、という表情でミライはベッドに潜り込む。五光は口論で疲れたのか、息を切らしていて――

（……たかが口論で、そこまで疲れる？）

ふとミライの頭を疑問が掠めたその時。

「あー……ミライさんが3人だあー？　くるくる回ってぐるぐるきてきてあははああー」

五光ダウン。さすがに生身の体で光速到達は辛かった。というかよく燃えなかった。

ダウンした五光は当然倒れる。何処に？　愚問。

ミライの上に。覆い被さるように。

「――――ッッ!!?」

顔を真っ赤にして、突然間近に接近した五光の顔をまじまじと見つめるミライ。

近づけばよく見えるが、彼の顔立ちはかなり整っている。絶世の、
とまではいえないが、街を歩けば10人中4人くらいは振り向くく
らいに。

けれど。

彼はまだ、8歳なのだ。

弱き者の盾《ガーディアンズ》。

二代目魔術師殺し《カウンターキル》。

亜光速少年《アポカリプス・アクセラ―》。

どれも、10歳にも満たない子供が背負うような名ではない。

（私達は……とんでもないものを、この子に背負わせているのかも
しれない……）

「エリアル、さん……」

彼の寝言が、ミライの心に重くのしかかる。

初代『魔術師殺し』ことエリアル・デラピット。

彼女の名は、それこそ大陸中に広まっている。

世界で最も魔術師を殺した人間。

全ての魔術を修めた賢者。

この世のものとは思えない美貌。

そんな人を師とした時点で、日中五光の人生は、すでに決まってしまうたのかもしれない。

そんな人の死を見た時点で、日中五光の精神は、すでにコワれてしまったのかもしれない。

彼が行く先には、必ず人の死がある。タタカイ戦火がある。ワザワイ戦渦が、ノロイ戦禍がある。

それでも彼は、歩むのを止めない。

(せめて……)

せめて彼の人生に、少しでも幸せがありますようにと。

彼の体の下から毛布を引き抜き、それで自分と五光を包んで。

そっと、触れるだけの口付けをしながら、ミライ・サステンベルグは願った。

L o s t - 3 模擬戦と反省会とお泊り会（後書き）

なんかハーレムモノっぽくなってきました。いや、別にハーレムが嫌いってわけじゃないですよ。全然羨ましくなんかありませんよ？

ただ単に自分は8歳の少年が美女はべらせるのはどうかなと思うだけで、嫉妬なんて見苦しい真似は（略）。

というわけで、感想・評価お願いします。だまされたと思ってやってください。

L o s t ー 4 魔術師殺し（前書き）

アレ？ 明日ってテストだった気が……

Lost-4 魔術師殺し

「……頭、冷やそっか」

起きてまず目に飛び込んできたのは、首まで真っ赤にして俯いているミライ。

五光は思わず抱き締めたくなるほど凶悪なその可愛さになけなしの理性を総動員。朝から疲れるなあ、などとぼやきながら布団をどけてベッドから降りれば鬼が二人。

「あー、これはそのですね」

「帝都警備団サーチ・アンド・デストロイアタアアアアック！
！」

日中五光は星になった。

「あ、朝からボコられた……」

ほうほうのていで神代宅から脱走した五光。ちなみに公開処刑には六子の父親も参加していた。本人曰く、『ウチの娘以外にも手を出すとは……八つ裂きにしてくれるわああああ！』とのことである。

六子の斬撃（木刀）を食らい、凜の魔術をまともに受け、神代父に切り刻まれた五光は亜光速になって逃走。能力の無駄遣いも甚だしい。

「あ、『ガーディアンズ弱き者の盾』のお兄ちゃんだ」

「あ、君はこの間の……」

弾けるような笑顔と共に五光へ歩み寄ってきたのは、この間強盗に入られていた家の娘。

手には買い物袋が提げられており、中には色とりどりの野菜が入っている。

「へえ、おつかいかな？」

「うん！今日は私がお料理するの！」

元気に返事しながら、少女は五光の手をきゅっと握った。

「お兄ちゃん、あのね、おかーさんとおとーさん、あの後お兄ちゃんにすっごく感謝してたんだ」

そう言って、少女は上目遣いで五光と視線を合わせ。

「だから、私がお料理ご馳走してあげる！」

言い放った。

「^{可愛い}「」▽ω「」→ッ！！」

別にこの主人公はロリコンとかではない。その辺はどこぞの兆弾使う暗殺者とは違うので注意して欲しい。

しかし、日中五光もどうやら女性にはだらしない方らしい。口元を緩めて、少女の手を握り返している。……一応言っておくが、彼はまだ8歳だ。そして少女は6歳ほど。兄妹にしか見えないと言えは見えない。

どのみち、某警備団の団長と第03隊隊長と出くわせば死刑……ではなく、私刑は免れないが。

「あ、お兄ちゃんこっちこっち！」

「ちょ、ちよっと待ってよお！」

勢いよく走り出す少女に引きずられ、五光は思わず微笑んだ。
どうせなら、こんな日常がいつまでも続いて欲しいと。

「……………」

爆炎。

まだ昼下がりだと言うのに、その周囲は橙に染められていた。
炎に包まれた家は黒い煙を空に上げ、炎に包まれた人影が家の中
を蠢く。

「う……ああ……」

五光は、自分の口を押さえながら後ずさる。尻餅をつき、またさ
らにそれらから距離をとる。

中に広がる酸味。五光は自分の胃からせり出すそれに気づいた瞬
間、顔を横に背けた。

「うああ、う……あ、ああ……」

吐しゃ物を地面にぶちまけながら、五光は必死に思考を巡らす。
たった8年しか活動していない幼い脳を、必死に働かせて状況を飲
み込もうとする。

どうしてだ。なぜこうなった。

（なんで僕は、また……護れていないんだ）

いつか言った言葉。

——『セイギノミカタ』。

誰かを救えるような人。

危機に颯爽と現れて。

そうして人を助けていくような、そんな人。

（僕は……僕は、僕は……）

ふと、五光の眼に暗い炎が宿った。

ゆっくりと立ち上がり、口元の吐しゃ物を腕で乱暴に拭う。

その姿は、まさしく魔術師殺し《カウンターキル》。

空中に人差し指を走らせる。描かれた魔法陣は、歪で、掌に入るような小ささ。

そこに刻まれた意思は、『力へ』の意思。

日中五光の唯一にして最大最強の武器、身体強化。もう何度描い

たか分からないその陣に、五光はその左手で触れ。

「――The Power of You is for others《その力は人の為に》」

言葉を紡ぐ。この力は人のために振るう、そう誓ったから。

遠い昔のようで、まだ1年しか経っていない。

けれど、エリアル・デ・ラ・ピットは、確かに、五光の中で生きている。

「僕は……」

ガタッ！ と音を立て、五光の目の前で、家の残骸が崩れ落ちた。

そして崩れた壁から這い出て来たのは――真紅のヒトガタ。

到底生物とは思えない、ドロドロとした体表。半液体のように、溶けた体が地面にべったりと落ちた。

失敗作。その名が相応しいだろう。

「――禁術」

五光は腕や脚、指の一本一本に魔力を通す。

「ラーゼライン帝国、刑法第3条……魔術を用いた生命体の生成を禁ずる」

恐ろしいほどに感情のこもっていない眼。

冷酷に冷酷に残虐に、二代目魔術師殺しは言葉を紡いだ。

「尚、そのような生命体は無条件での殺害を許可する——意味が解るね？ 今から君達を殺す」

そう言い放ち、魔術師殺しは真の誕生を見た。

L o s t - 4 魔術師殺し（後書き）

なんか中途半端に終わってすみません。
次回はもうちつと長めにしたいと思います。

Lost-5 魔術師殺し 其の二

「……新入り？」

ミライの言葉に、六子は眉をひそめた。

何でも、ラーゼライン帝国帝都警備団に、新たな団員が加わるらしい。

しかし、帝都警備団とは本来、トップクラスのエリートが集まる精鋭集団だ。結成時、帝国に居た上級の魔術師はほとんど警備団に引き抜かれている。

……もつとも、1年前のある事件で、警備団員は3人に減ってしまったが。

「帝国に、まだこの警備団に入れるような魔術師が居たの？」

「いえ、帝国ではありません」

その言葉に、六子はハツとしたように顔を上げた。

「まさか……共和国民……！？」

無言で頷くミライ。

六子は内心で舌打ちをしながら、警備団の制服を羽織った。

——ちなみに現在、二人は絶賛お着替え中である。

「ん？　なぜか私だけサービスカットが無かった気がするのだが…

…」

神代宅の道場で、明日原凜はふと首をかしげた。何故だろう、今天の采配があった気がする。

「団長、どうかしたのですか？」

「ああ、いや、なんでもない」

受け答えを適当に流し、凜は目の前で正座している少女に眼を向けた。

——名はシホ。本人曰く、苗字は捨てたそうだ。

歳は五光の一つ下。まだ7歳だ。

経歴としては、アンゼライン共和国に住んでいたが先の大戦で家を失い、その後は帝国内で路上生活を営んでいた、ということらしい。

しかし、『魔術師殺し殺し《カウンターキル・カウンター》』を名乗る魔術師に拾われて魔術を学び、才能を開花させた……ということらしい。

「それで、だ。貴様はまだ、魔術が何かを理解していない」

凜は懷から、二つの小さなビンを取り出した。

「それは？」

「ある二種類の魔力が、この中にはこめられている」

そのビンを、凜は二つとも手から放した。重力に引かれて、ビン

は床へと落下し――割れた。

「――Flames of purgatory《煉獄の炎》」

凜が空間を人差し指でなぞり、魔方陣を描く。

瞬間、その魔方陣が発火し――龍をかたどった炎が、部屋に放たれた！

「ッ！」

「どうした？ この程度、警備団員なら誰でもできるぞ？」

額に汗を浮かべるシホ。凜はふっと笑うと、天井を見上げた。

「まあ、うちの団員の中にも約一名、魔術がほとんど使えないやつがいるけどな」

「あ……」

と、シホが思い出したように口を開く。

「『亜光速少年《アポカリプス・アクセラー》』さんですよね」

「いや、ついこの間『光速少年《タキオン・アクセラー》』に格上げされたけどね」

はあ、と凜はため息をつく。

「ミライの見立てだと、人が体に溜め込める魔力量の限界を超えることで逆に魔力を放出し、極限の加速を得る、だったか……」

「空気との摩擦で、燃えたりしないんですか？」

不思議そうに訊ねるシホに、凜は苦笑いを浮かべた。

「体の表面を、魔力で覆っているそうよ」

「……ッ!？」

そんなことが、できるのか。

できるとすれば、それはまさしく天才ではないか。

本来、魔力とは他の魔力と反応させて魔術を行使するものであり、
一種類の魔力単体では何もできない。それが常識。

けれど——彼は、まさしく一種類の魔力を扱うプロ。

限界圧縮による魔力爆発。

体表の魔力コーティングによる摩擦熱の無効化。

「まったく、困ったもんよ。あの馬鹿は……魔術の才能が一極化し
すぎなのよ」

そう言って微笑む凜の表情は、恋する乙女のように。

「……警備団って、その人のハーレムなんですか?」

バキン。

砕けた。ヒトガタが。ココロが。ジブンが。

首を引き千切る。血が噴き出す。僕にかかる。

腕を？ぎ取る。血が噴き出す。僕にかかる。

膝蹴りで胴体を吹き飛ばす。血が噴き出す。僕にかかる。

「嗚呼あゝああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

ああああああああああああ！！！！」

殺す、殺す、殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺
す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺
す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺
す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺
す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！　殺

全て、ブチ殺してやるッ！！

右手に魔力を圧縮し、爆発させる。衝撃波でヒトガタが壁に叩きつけられ、そいつの首が変な方向に曲がった。

身体強化をさらに増し、余った魔力は体の表面を覆わせる。そして脚部に入りきらなかった魔力を圧縮放出。膝蹴りを光速で放つ。それをまともに受け、1体のヒトガタの腰部（と思わしき部分）から上は吹き飛んだ。

鮮血の噴水を、特に避けることもなく通り過ぎる。すでに体で血に塗れていない部分はなく、全身が真紅に染まっていた。

一発のボディブローが胴体を貫き。

左フックが頭部を砕き。

まだだ。まだ、殺し足りない。

「かえ……せ……」

ブチンッ！

何かが千切れた。瞬間、左腕の感覚がなくなる。

——知るか。

左側に居たヒトガタを蹴り飛ばす。そいつは、人の——否、僕の左腕をくわえたまま吹き飛んだ。

片腕しか、ない。

さすがに囲まれたら面倒かもしれないなあ……

自分でも恐ろしいほどに、冷たく静かに思考が回る。それは冷静と言えるのか、はたまた冷酷なのか。

だけれど、今考えるべきことはただ一つ。

——片腕で、いかにこのバケモノ達を多く殺し尽くせるかだ。

「なっ、や、そ、そんなことは……」

顔を赤くして照れる凜。

と、その時バーンと豪快な音を立てて、道場の扉がぶち破られた。

「団長ッ！ ハーレムとは一人の男性に対して複数の女性がいる状況の事を指します！ 五光君には私しか居ないのでハーレムという言葉は適用されませ——すびゃっ」

「……第03隊隊長、少しは行動を慎んでください」

殴りこむようにして飛び込んできた女性、神代六子を、後から入ってきたミライ・サステンベルグがチョークスリーパーで墮とす。

「団長、警備団に応援要請です」

「む、早速任務ですか」

ミライはシホを一瞥すると、その応援内容を告げた。

「郊外の民家で火災が発生し、中で人が魔術を使って暴れているそうです」

そこは地獄だった。そうとしか言い様がなかった。
未だに少しあがる黒煙と黒く燃え尽きた建築材が、火事の凄まじさを物語っていた。

けれど、何より衝撃的なのは――地面という地面に転がる、赤い物体。

時折痙攣を起こすその様はまさしく生物。
けれど、どろどろとした生々しい表皮が、見る者に吐き気を催させる。

「うう……あゝあ……」

その光景を見たシホが、廃墟と化した建物の隅に嘔吐する。

「おい、こいつらを運んで解剖しろ」

帝都警備団として、テキパキと作業する凜ら三人も――やはり、顔色は優れない。

「あ、そういえば警備団員の方がさつき居ましたよ」

その言葉に、凜たちは五光だろうと思った。それは正しかった。

五光は、バケモノよりバケモノだった。

その場に居た全員が言葉を失くす。

廃墟が積み重なり、ピラミッドのようになった木材の頂上に、彼は座り込んでいた。

夕暮れの空を見上げながら、彼は想う。

——また、護れなかった、と。

「五光……」

下から聞こえた声に、五光はそちらを向く。自分を心配しているのか、団長である凜がこちらを見上げるようにして佇んでいた。

思わず手を振ろうと、左腕を上げ。

あるべきものがないことに、気づいた。

思わず苦笑しながら、五光はその木材の山から飛び降りた。
衣服は所々破れ、燃え。

それに気づけないほど、真っ赤だった。

ふと頬に手を当ててみれば、べっとりとした血の感触。もったも、
すでに右手も血塗れだったので自分では確認できないが。

「……職務ご苦労様です、団長殿」

右腕で敬礼しながら、五光は無感情に『報告』する。

「たまたま知人の家であるここを訪ねたところ、地下室にて禁術と
思しき研究を発見しました、即座に制圧すべきでしたが、研究の成
果と思われるアレが生命活動を開始」

そう言って五光は、ヒトガタの死骸を指差し。

「ここより脱出を図りましたが、警備団に連絡する間に周囲へ被害
が及ぶと判断、自分が対応しました」

結果はご覧の通りです、と五光は無表情のまま周囲に視線を巡ら
せる。

「では自分は、怪我の治療を行いたいのです……ッ」

そう言って五光は歩き出そうとして、後ろから羽交い絞めにされ

た。

「何、してるのよ……」

「……六子さん、放して」

「イヤ」

にべもなく拒否。

「なんで、こんなことを……」

「だって、僕達はガーディアンズじゃないですか」

そう言って五光は、六子を振りほどく。

そして、真っ直ぐに彼女を見て、言い放った。

「弱き者の為なら、僕はいくらでも血に塗れてやる……文字通り、『盾』として」

思い出す、亡き師匠の姿。

思い出す、あの時彼女は『弱き者^{日中五光}』の『盾』として散った。

なら、自分も『弱き者の盾』として散ってやる。

護りたいものを護れなかった。ならば、もう『セイギノミカタ』失格だ。

「五光、君ッ……！」

五光は振り返らず、医療班が居る方へと歩みを進めた。

L o s t ー 6 魔力生成機関（前書き）

申し訳ありません！ 更新が遅れました！
しかも短い……さらに説明多い……

つ、次こそはバトルシーンなんだからっ！

Lost-6 魔力生成機関

「先輩、村の人と掛け合って、毎年収穫されたお米の1%を分けてもらえることになりました」

「！ そんなに……」

「皆さん感謝してましたよ。『あんなに強い人が護ってくれるなら、俺たちの村は一生安泰だ』って」

「ハハッ、嬉しい誤算だね。てっきり化け物扱いされるかと思ったんだけど」

「……大丈夫です。先輩は……私が、支えますから……」

「ん？ なんて？」

「い、いえ！ 何でもありません！ 失礼します！」

「……君に支えてもらえるなら、百人力だね……」

「――今度こそ、護ってみせる」

日中五光は9歳になっていた。

ここは帝国でも辺境に位置する、とある小さな農村。

五光と、そして警備団に新しく入ったはずの少女、シホは、農村

を護る魔術師として雇われることとなった。

——二人の肩書きにもう、『帝都警備団』の文字はない。

村長から譲ってもらった、小さな小屋の中で五光はその左腕をまじまじと見る。

自分のものとは見るからに違う、白くて華奢で、けれども芯が通った腕。

（ああ、エリアルさん。今日も僕は生きています）

「——魔力生成機関？」

新たに帝都警備団の本拠地として建設された、木造の巨大な建築物。

といっても僅か二階建て、しかし地下には大浴場設備有。何か色々履き違えた施設だ。

「ええ。何でも——魔力を、半永久的に生成するとか……」

——……………

何とも痛い沈黙が場を覆う。

ソレの存在を報告したミライ・サステンベルグは、目の前で絶句する明日原凜の表情にため息をついた。

「……すまない、耳がおかしいようだ。もう一度言ってくれ」

「魔力を半永久的に生成する機関が、発見されました」

その言葉に、凜は何か悟ったような表情になり。

「——なんっじゃそりゃあああああああああああ!!」

本部を絶叫で振るわせた。

「——魔力、多過ぎでしょ……」

日中五光は、自分の左腕を見やりため息をついていた。

彼は大きな岩に腰掛け、恨めしげに大空を見上げる。

——魔力生成機関。

その存在は、世界の『常識』を壊し尽くした。さらに今までの『非常識』を無理矢理『常識』に変えてしまった辺り、いかに非現実的な存在かが伺える。

単純に言えば、純金を無限に生み出す魔法の機械みたいなものだ。元々、魔術を行使する際は、大概是魔力をビンなりに入れて持ち歩いたりするのが普通だ。運が良ければその場の空気中に漂う魔力を使用することもできるが、果たしてお目当ての魔力がその場に存在するかどうか分からないので賭けとしては分が悪い。

であるからして、魔力の量には一定限界がある、というのが世間の共通認識なのだ。

だからこそ、無限の魔力を生み出す機関など出鱈目にもほどがあった。

さらに、その機関は体内にある。

意味が、分かるだろうか。

「……たく」

五光は視線を落とし、これから向き合わなければならない現実
に眼を向ける。

——元々山だったソレは、中腹から上を失くしていた。

『いい？ あたし達が使ってる魔術ってのは、込められた魔力の量
に威力を比例させる。魔力の量を2倍にすれば威力も2倍、ってカ
ンジにね』

そんな言葉を聴いた覚えはあるのだが、ではこれは一体どうい
うことだろう。

確かに、自分がしたのは一種類の魔力を集中させて爆発を起こす
魔術。

——余談ではあるが、実はシホから『必殺技壱号』と身も蓋も無
い名を付けられていたりする。

そして出たのは、爆発ではなく白銀のレーザービーム。そしてそ
れは山の中腹に殺到し。

晴れて『必殺技貳号』の完成である。

魔力生成機関は人間一人につき一つしか発現しない。理由には諸説あるが、一般的なのは二つ以上は人体が魔力保有量に耐え切れないから、というもの。

では。

今現在、心臓と左腕に一つずつ、合計二つの機関を持っている日中五光は何なのだろうか。

(……とりあえず、シホ呼ぼう)

五光はすみやかに思考を切り替えると、未だに熱を伴う左手をさすりながら岩から飛び降りた。

『報告：各地に散らばる魔力生成機関（以下、『機関』と称す）について

NO. 1…エリアルⅡデⅡラピットの遺体の左腕より、機関を確認——直後、日中五光に腕ごと移植される

NO. 2…日中五光の左胸心臓内部に機関を確認

NO. 3…ミライ・サステンベルグの左目に機関を確認

NO. 4…神代十花^{とおか}の脳内に機関を確認

帝国内に存在する機関は以上4つと思われる。なお、NO. 1とNO. 2を同時に保有する日中五光との接触は継続中。残るNO. 3とは接触を打ち切り、NO. 4に関しては接触の目処有。今後とも機関の研究を続行する。

S』

闇が、動き出した。

Lost-6 魔力生成機関（後書き）

ちよつと蛇足を。

Q…これってチート？

A…はい。普通はビンとかにつめて運んでるのに、体内で無限に生み出せるのでチートです。さらに二つあるので生成する速度も量も倍です。

Q…レーザービームってなんぞよ？

A…はい、前に五光君が起こした爆発は魔力の一極化によって爆発が起きただけですが、今回は魔力量に耐え切れず魔力が噴き出した結果、こうなりました。いわば間欠泉のようなものです。

Q…帝国以外に国ってあるの？

A…世界を見てみれば、現代同様多くの国があります。しかしこの小説ではその中でも帝国に注目した構図です。共和国は帝国に吸収されました。あと、帝国の隣に同じぐらいの規模の王国があります。以下、一覧

帝国…ラーゼライン帝国。じつは建国されてまだ10年

共和国…アンゼライン共和国。ラーゼライン共和国に滅ぼされた。

国王は処刑

王国…テルスゼライン王国。規模は帝国とほぼ同じ。

Q…最後に出てきた、神代十花って誰？

A…登場予定有の女性キャラです。ただ当分先です

蛇足なげえ……（汗）

今後はちよつち鬱な展開に。
ではでは、シリアスバトルシーンが『魔生曰』を盛り上げると信じて！

評価・感想待ってます！

Extra 1 とある書類（前書き）

完全な蛇足です。この話そのものが蛇足です。ご注意ください。

Extra 1 とある書類

その書類は、薄暗い部屋の中、たった一つしかない机の上に積まれている。

書類の表紙には、こう書かれていた。

『魔生日まとめ』

——ここは、現代ガンアクション小説と主人公最強ファンタジー小説の連載を両立させようとする、愚かな作者の部屋（脳内）。

人物編

・日中五光

8歳↓9歳

共和国出身の男の子。

実は身長の低さが悩み。9歳時点で124cm。身のこなしは軽い。

頭は結構いいが、天才とまではいかない。主にツツコミ担当。

ごく普通の子供だったが、ある日少女を助けられなかったことで力を欲し、毎日鍛練を積む。そして出会ったとある魔術師に戦いを習った後、帝国へと流れ着いた。

一応警備団の中では一番強く、さらにはハーレムも作っているといるという凄まじい状態。

戦闘に関しては、高速で接近した後の一撃離脱。

身体強化を極めているため、移動速度は身体能力の上昇だけで音速、過剰魔力の放出によって光速まで上げられる。

さらに一種類の魔力を限界まで圧縮することによって爆発を起こすことも可能（命名…必殺技壱号）。ちなみに最近は魔力量が多すぎてレーザービームが出るように（命名…必殺技貳号）。

妹が居たが、現在は生死すら不明。

二つ名

- ・『亜光速少年』↓『光速少年』
アポカリプス・アクセラー タキオン・アクセラー
- ・『二代目魔術師殺し』《カウンターキル》
- ・『弱き者の盾』《ガーディアンズ》

魔術

- ・身体能力強化
魔力を身体に通すことで筋力などを上げる基礎的な魔術。
五光の得意分野。

詠唱「――The Power of You is for others」《その力は人の為に》

- ・タキオンアクセラ光速到達
身体強化の魔術の際、余った魔力を体外に放出することで光速まで速度を上げる技。
過剰魔力を外に放出、というのは、言ってみればブーストみたいなもの。ジェットエンジンの魔力版。

- ・必殺技壱号
一種類の魔力を限界まで圧縮し、爆発させる危険な技。
爆発の威力はある程度まで調整可能らしく、爆発を利用して衝撃波を起こすことも可能。

詠唱(?) 「――弾けろ!」 「――爆ぜろ!」

・必殺技式号

必殺技壹号の強化版。爆発はしないが圧縮された魔力が間欠泉のように放出され、レーザービームのように放たれる。エリアルスの左腕を移植されたことで魔力量が2倍になった五光が放った技。山を跡形も無く消し飛ばすほどの威力。

・エリアルスデラピット

まずショタコン。そして重度のS。五光に惚れた人第一号。五光のファーストキス相手。

五光に基本的な知識・戦い方を教え込んだ女性。年齢は不明。実は結構すごい魔術師で、世界で最も多くの魔術師を殺したらしい。

帝国軍兵士の矢から五光を庇って死亡。

二つ名

・『魔術師殺し《カウンターキル》』

・神代六子

五光が居候している神代家の娘さん。妹が居る。五光に惚れた人第二号。

神代流剣舞の師範代で、剣術に関しては右に出る者は居ない。仕様武器は日本刀『鬼切』。

奥義

・神代流剣舞奥義其の式『せみしぐれ蝉時雨』

・明日原凜

帝都警備団団長。五光に惚れた人第三号。

エリアルに次ぐ魔術師で、帝国内では最強と謳われる。

大規模魔術を使うことが多く、威力は折り紙つき。

魔術

アンミリテッドシルファ

・神々への反逆

上空に魔力で雲を創り出し、そこから魔力による雷撃を落とす魔術。

広範囲に無差別攻撃を行うため、誤って味方を撃墜することも。

詠唱「your No human《人ならざる者よ》、Dep
art from the my world《我が世界より去ら
ぬば》、Disempower to you《その力を奪わん》」

・蒼空の飛翔翼

ヘヴンズフエザー

上空に巨大な魔法陣を描き、それを媒体にして巨大な翼を創り出す。

その翼の一つ一つが鋭利で、術者の意思で瞬時に翼を飛ばすことが可能。

鉄を貫き地面を抉るほどの威力だが、五光は光速に突入すること
で全て回避してみせた。

詠唱「It's a blue sky birds《青空の鳥
よ》、will flap its wings《翼をはためかせ
》、fly away to the sky《天空へと舞い上が
れ》」

・ミライ・サステンベルグ

若干影薄めだったが、五光のセカンドキスを奪った人。五光に惚れている人第四号。

強さは不明だが、左目に魔力生成機関を持っている模様。

・シホ

警備団に新しく入るはずだった女の子。何故か五光についてきた。五光に対しての好意は不明。少なくとも悪くは思っていないよう。力量は未だ分からず、今後の活躍に注目が集まっている。

用語編

・魔力生成機関

無限に魔力を生み出す機関。計測不明な確立で、人類の体内に発生するらしい。

発生する場所はバラバラで、共通性の欠片もない。

ちなみに所有者が生体活動を止めたら機関も停止する。その点、五光は心臓に機関があるため死ぬまで魔力を生成することが可能。

さらに物理的な攻撃で破壊することが可能であり、左腕にあったら左腕を切り落とせば魔力の生成はできなくなる。

・魔術

魔力と魔力の反応を使った術式。

早い話、ファンタスティックな化学反応式である。

・魔力

空気を構成する物質の78%を占める物質。未解明なので実質ダークマター。

魔力にも種類があり、数は計測不能。一説によれば10の78乗

とか。

・禁術

要するに、魔力で生命を創りだす技。

魔力で構成された生命体は、魔力量によっては強大になるうえに魔力さえあればいくらでも量産可能と、危険極まりないため帝国内での生成・利用は禁じられている。

その書類は、机の上にぽつんと置かれている。

次にその書類が開かれるのがいつなのかは、作者ですら知る術はない……

Extra 1 とある書類（後書き）

Q..身体強化極めたら、誰でも光速いけるんじゃない？

A..はい。しかしこの世界では身体強化はあくまで魔術に慣れるための、いわば超初心者向けの魔術です。大概の人は凜が使っていたような大規模殲滅魔術のほうに流れます。身体強化を続けるにしても、肉弾戦のフォロー用だったり、純粋に身体強化を極めようとする人は皆無です。

Q..じゃあなんで五光は純粋に身体強化を極めてんの？

A..魔術の才能が無く、それしかできなかったからです。

蛇足に蛇足を付け加えるなんて……（汗）
とにかく、次回は本編を大幅に進めます！
感想・評価よろしくお願います！

L o s t ー 7 魔術大戦（前書き）

今回はようやくバトルシーン。
今になって思えば、あらすじが意味不明……

Lost-7 魔術大戦

——第一次魔術大戦。

帝国は世界の覇者にならんと、ついに王国にも牙を剥いた。

250名のエリート魔術師——無論帝都警備団のメンバーも入っていた——によって構成された特殊部隊を王国の軍基地に送り込み、一週間で魔術師と市民を総計7000名虐殺。

世界は震撼した。帝国の貪欲さに。帝国の魔術師の有能さに。

「……バカ、だろ……」

五光は思わず嘆息した。

——あのクソジジイ、本気で世界をのっとるつもりか？

「……先輩、その、徴兵命令が出ています……」

「……どこから？」

「……王国からです」

ちなみに、五光が住んでいる村は、3日前に王国に占領されていた。

「いやー、帝国とは大違いだねー！ あ、馬さんはコッチコッチ」

「先輩、あんまり大声で叫ばないでください……恥ずかしい」

現在五光は王国軍の兵士を誘導中。こちらに敵意が無いと知ると、あちらの部隊長は朗らかな笑みを浮かべて握手を求めてきた。

(……割とハンサムだったな。シホもちょっと見惚れていたみたいだし——後で決闘申し込もう)

知らず知らずの間に五光は拳を握る。鬼畜な上に独占欲強しとは、10歳の少年とは思えない。

「……何がハンサムだ。何がイケメンだ。そんなの地中海に沈んでしまえばいいんだ」

自身も十分美形だということに、彼が気づくのはいつだろうか。

「——じゃあ、この村は今日から王国領だ、と?」

「……随分あっさりとしてるんだね」

「帝国よりは王国のほうがマシってだけです」

五光は不機嫌そうに、手元のカップからコーヒーを啜る。ちなみに微糖だ。

対する王国軍の部隊長は不思議そうに五光を見た。

「……君は確か、警備団所属の『タキオン・アクセラ光速少年』だろ? 帝国に未練は無いのか?」

「警備団所属は元です。未練なんて……俺は元々共和国民ですし……」

嘘だった。未練なんて山ほどある。今すぐ帰って、皆に会いたい。凜にからかわれて、ミライの隣に居て、六子と笑い合う。

(——どうして)

王国に徴兵されると言うことは、すなわち彼女達との敵対。

（――どうして僕は、護れないんだろう）

護るのではなく、壊す。

その非常な現実には、五光は奥歯を噛み締めた。

王国軍は、基本的に排他的だ。

当然、そんな集団の中に元帝国のエリート魔術師が混じれば白い眼で見られるのは明白なわけで。

「……あらら」

自分に割り当てられたテントに移動し、真赤に染まった毛布を見て五光はため息をついた。

同じテントで寝る他の兵士は既に寝ており――否、寝た振りをしており、五光は毛布を軽く持ち上げる。

「これは……鶏の血かな？」

色だけなら目を瞑れば我慢できるが、ぬるぬるとした感触が不快極まらない。

「――仕方ないか」

毛布を丁寧に折りたたみ、五光は野戦服のまま、テントの中で横になった。

その数時間後。

『――敵襲!』

部隊長の大声に、五光はガバツと跳ね起きた。

左腕と心臓内部の機関の魔力生成を始め、体中に魔力を纏わせる。

「――The Power of You is for others 《その力は人の為に》」

テントの中から音速で飛び出し、周囲の状況を確認。テントが散在する平原の中、所々は火を上げていた。

「あの火は……まさかッ!」

「――Flames of purgatory 《煉獄の炎》!!」

轟! と音を立てて、巨大な炎の龍が夜空に放たれた!

「あれは……団長かッ!」

五光は身体の表面に魔力をコーティングし、龍目掛けて駆け出す。景色が瞬時に変わり、五光は夜空へと飛び出した。

龍が顔の向きを変え、空を駆ける少年へとその眼を向けた。

五光は臆することなく左手をかざすと、喉を潰さんとばかりに叫ぶ。

「――果てろオッ!!」

瞬間、かざされた左手から白銀の巨大なレーザーが照射された！
まるで巨大な柱のように太いそれは、龍の顔面を包み込む。
やがて魔力照射が終わる頃には、龍の頭部は跡形も無く消し飛んでいた。

続けざまに右手に魔力を纏わせると、それは先ほど同じように
白銀の光を放つ。

腕の延長線上に展開された魔力はまるで刀のような形を形成し、
輝きを一層強くした！

「――裂けるオオオオオオオオオ!!」

重力に従って落下する五光は、光の刃を龍の身体に食い込ませる。
そのまま長い身体を縦に切断し、五光は地面に着地した。

彼の背後に、炎の龍が地面に沈み込み、空気に溶けるようにして
消滅した。

五光はそれだけでは止まらず、夜の暗がりの中、身体強化を眼に
施した。

闇を木を全てを通し、確かに見えるのは帝国軍の兵士達。

（数は……師団規模！？ 冗談じゃないよ！）

思わず声を上げそうになりながら、五光は体内で魔力を生成する。
この1年間、五光は徹底的に、膨大な1種類の魔力を扱う魔術の
鍛練を積んできた。

だからこそ――今の五光は、警備団時代の少年とはもはや別格！

「――魔力集中開始」
スタート・アップ

己の体内で生成した魔力を全て、右手に込める。

「――全魔力形成終了」
エンド・アウト

白銀の光を放つ右の拳を見やり、五光は闇の向こう側に居る帝国の軍勢を睨みつけた。

王国軍の兵士も装備をつけているが、目の前で凄まじい魔力を放つ五光に気圧され――動くことすらできない。

誰もが息を呑む。五光の額から、脂汗が滴り落ちた。

「――魔力放出……開始ッ!!」
バレット・クリア トリガー

五光が右手を突き出した瞬間、先ほど龍に向けて放たれたレーザービームとは、全て――魔力量から大きさまで、全て――が桁違いな、強大な魔力砲が放たれた!

それはまさに、闇を塗り潰す白銀の閃光!

生き物のように波打ち、森の木を食らい、帝国の兵士達へとそれは殺到し――

まるで盾にぶち当たったかのように、直前で防がれた!

見えない壁に阻まれるかのように、白銀の魔力砲は魔力を辺りに撒き散らしながら徐々に終息していく。

「――ッ」

己が放った一撃を防がれ、五光は口元を歪める。
やはり、来たか。

「ミライ・サステンベルグ……！」

焼け野原などという言葉では生ぬるい、全てが消滅した更地の向こうに、悠々と片腕を突き出す、青い髪の女が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7154j/>

魔導師の生まれた日

2010年10月9日20時00分発行